

城西病院の DMAT 発足を記念し講演会

3月28日に城西病院が茨城県から DMAT 指定医療機関として指定され、城西病院内で DMAT チームが活動をスタートさせたのを記念し、6月1日、通所リハビリセンター 茶釜の湯で茨城県総括 DMAT の安田貢氏を招いて、講演会が開かれました。講演には、病院や社会福祉法人 達生堂のヒューマンハウス、すばるの職員をはじめ、外部からも筑西広域消防本部、結城市、結城市社会福祉協議会、結城看護学校、地域の人たちなど約 350 人が詰めかけて、熱心に講演を聴いていました。

安田氏は、災害の危機管理として「リスクマネジメントと、発生してからのクライシスマネジメントがあり、想像すること、予期することが大切。そして、平時と有事では全く異なる事態が起きる」と語り、「茨城県はこの5年間で東日本大震災、つくば市竜巻災害、豪雨による常総地区の水害が発生し、災害の多い県」と指摘。過去の災害でクライシスマネジメントの課題などを指摘したうえで、「多くの災害に見舞われた経験から、徐々に危機管理能力や体制が進化した」と評価しました。

過去に、様々な災害と向き合った安田氏は、災害は自然災害と交通事故や爆発、テロ、原発事故などの人為災害があることを示し、災害医療では「限られた時間、人、物で最大限の効果が得られる医療を提供する



やすだ すずむ 氏

脳神経外科医、救命救急医として筑波大附属病院や県西総合病院、北茨城総合病院に勤務。東日本大震災の際には筑波大附属病院で大震災

対策副本部長、つくば震災復興緊急医療調整室長として活動。平成24年から、水戸医療センター救命救急センター長、救急医療部長となり、茨城県総括災害医療コーディネーターなどとして活躍しています。

こと。そして、全ての患者にとって必要とされる治療は不可能」と延べ、熊本で発生した大震災で駆け付けた医師の「4月14日の前震の時、病院玄関前で患者に黒のトリアージタグ（治療不可能）をつけないといけないことがつらかった」という手紙を紹介しました。

阪神淡路大震災では、発生直後に災害医療が機能していれば500人が助かったとされ、

この震災を機に DMAT の整備が進みました。安田氏は、米国と日本の災害医療を紹介。災害医療ではさまざまな機関の連携が必要とし、「支援者目線ではなく、被災者目線が大切」と指摘。また、「DMAT は、丸腰で駆け付けるのではなく、自分の命を守るだけの装備を持っているのが必要」と強調。そして、災害時には連携とともに情報収集が必要とし、災害への心構えなどを解説しました。

平成29年6月3日

© Tasseido group

茨城県総括 DMAT の安田貢氏が災害医療を解説